

事業名 進路学習会～不登校からの進路～



- 1 実施団体 (特非) フリースペースロビンソン
- 2 担当課 教育委員会指導室
- 3 実施時期 R6年10月27日
- 4 参加者 56名
- 5 実施場所 青梅織物協同組合2階ホール
- 6 事業の目的 (1) 不登校の子どもと不登校の子を持つ親が心身ともに安心して過ごせる環境をつくること
(2) 不登校の子を持つ親たちの不安に応え、希望を育み、子どもたちの豊かな自立と成長に寄与すること
- 7 役割分担
 - ・団体の役割 企画および運営、会場の確保、広報活動
 - ・担当課の役割 会場の確保、広報活動

8 事業の効果（どのような地域課題が解決できたか）

- ① 不登校の子の進路についての不安が多くあることがわかり、それに応えることができた。

事前申し込みに寄せられた声から、子どもが学校に行けていなかったり、休みがちであったりする保護者の心配・不安が大きいことが伺われた。これらがほんの一端であり、おそらくもっと多くの人が悩み、困っているだろうと予想される。事業終了後の参加者へのアンケートからは、「なんとかなる！」「気持ちが明るくなった」といった声が寄せられた。

- ② 学校の教員からも申し込みがあり、不登校児童生徒の増加が課題となっており、教員側も学びたいと思っていることがわかった。
- ③ 小5～中3の全家庭に学校を通してチラシを配布したことにより、これまでつながりのなかった人達の参加が多くあった。また、裏面の情報を見て不登校の子どもの居場所につながった人もいた。
- ④ 講師・体験者との丁寧な打ち合わせや内容の検討を、団体の当事者性を活かして行い、より保護者の気持ちに添った内容にすることができたと思う。また、グループ交流や個別の相談、親の会の紹介を通して、「ひとりで悩まないで」というメッセージを伝えることができた。
- ⑤ 保護者、教員（小・中・高）、支援者、議員、市民等、様々な立場の人たちが一緒に学び合えたことが親たちに安心感を与えた。同時に子どもたちの豊かな自立を支えるネットワークが広がった。また、こうした進路学習会を自分たちの地域でもやりたい、という声が広がった（羽村、瑞穂）。

9 目標達成

事業の目標：子どもたちの進路と自立についての学びを通して、不登校の意味と、どの子にも進路は開かれていることを理解し、子どもの自己決定を見守れる大人のつながりを広げる。

目標の達成具合：

- ① 講師の話から、不登校の子どもの進路について、様々な選択肢があることを理解できた。特に、定時制高校の教員の話から、定時制の様子が伝

わり、新たに選択肢に加えられた人が多かった。

アンケートより

「定時制の先生の話聞き、どういった学校生活なのか知ることができました。不登校→通信制だけではなく、他の選択もあり、少し気持ちが明るくなりました。」

「平野先生、播正先生のお話を聞いて、知識だけでなく、高校も安心して選ぶことをしているのだと、また不登校の子に寄り添ってもらえるところがある、まだまだあるのだと、安心ももらった次第です。」

- ② 中3での進路選択の意味や、子どもの自己決定を尊重するが、子どもにとっての決めることの重さや揺れる気持ちに寄り添って支えることの重要性について、理解を深めることができた。

アンケートより

「平野先生の、大人が勝手に進路をすすめてはいけないという言葉にハッとしました。私もやってしまいそうなので。子どもの決めたことを肯定してあげる。改めて大切だなと思いました。」

「子どもとの向き合い方も考えさせられました。本人のことを否定せず、肯定できる保護者でありたいです。」

「受験を目前に、今日のお話を聞けて本当によかったです。自分で決められるよう、応援しながら見守りたいです。」

- ③ 体験者の話から、いろいろな進路があってよいことや、いつからでも何度でもやり直せること、自分で試しながら決めていくことが大切であることについて、具体的に理解することができた。

アンケートより

「進路選択はいつからでも、何度でもできる。子どもが決定できるまで待つことが大切と学びました。」

「体験者の方の声は心にひびきました。」

- ④ 様々な立場の方の参加があり、つながりが広がった。また、子どもを見守るつながりの必要性についても共通に理解ができ、グループ交流を体験した参加者からは「親の会に参加してみたい」といった声も寄せられた。

10 事業の実施内容

①元中学校教員、定時制高校教員による講演

- ②不登校の子を持つ親と、不登校経験を持つ青年の体験談
- ③グループ交流（少人数で具体的な質問や悩みなどを語り合う）

11 実施団体と担当課の事業評価

4 はい 3 どちらかといえば「はい」 2 どちらかといえば「いいえ」 1 いいえ

調査項目	団体	担当課
(1) 事前の話合いを十分に行い、役割分担は明確になっていた	4	4
(2) 事業に最もふさわしい協働形態が選択された	4	4
(3) 協働の役割分担は適切だった	4	4
(4) 協働相手は適切だった	4	4
(5) 対等な立場での協力関係を築けた	4	4
(6) 協働相手の自主性・自立性は尊重された	4	4
(7) 事業実施は円滑になされた	4	4
(8) 設定した目標が達成された	4	4
(9) 協働で行うことにより効果がある事業だった	4	4
(10) 今後の課題と改善策をお互いに話し合った	4	4

12 まとめ（今後の課題や改善点など）

・団体側

学校に行くことが難しくなり、立ち止まる子どもたちにとって、進路と向き合うにあたり、「どこの学校に行くか」（外側の進路）ということだけでなく、その子の内面の葛藤を経て「どう生きるか」（内側の進路）をつかんでいくことの大切さを学ぶことを中心に据えてきたが、概ね受け入れられ、歓迎されていると感じている。同時にそれは不登校に限らず、思春期を生きるすべての子に関わる問題であるともいえ、このことを取り組み段階からどう伝えていくのかが課題になっていると感じた。

不登校で悩む親たちに届けたいと「不登校からの進路」とサブタイトルをつけたが、「不登校」という言葉がネガティブなイメージを与えるという指摘や、このタイトルにとらわれて参加者の幅が狭まったのではないかという指摘もあった。進路に対してどの子にとっても大切

な課題であることが伝わるような表現の工夫や取り組みなど、検討していきたい。

進路についての学習は、毎年必要であると思うが、今年は10月に行ったため、中3の子をもつ親の参加は少なかった。もちろん、中2以下の子にとっても必要ではあるが、時期や回数、内容について、多くの親や子が孤立せずに、学び合える仕組みとなるよう、考えていきたい。

必要な人に情報を届ける工夫として、学校を通してチラシを全家庭に配布したことは有効であったが、その印刷や配布にかかる経費の確保は今後も課題になると思われる。また、高校生の不登校も増えていることから、中学卒業後の年代の子どもたちへの情報提供を含めた支援体制の構築が必要になっていると思われる。

・担当課側

不登校傾向のある子どもをもつ保護者に向けた進路の情報提供として、市が十分に組み合わせていない現状では、本事業は効果的であったと思われる。本事業のポイントは、子育て中、進路というターニングポイントについて悩む保護者に対して、進路の具体的なイメージ等を知ってもらうことによる不安の解消および子どもの意思で進路を決定することの重要性を知ってもらうことであると捉えている。

参加者からの指摘にもあったとおり、不登校という言葉で参加者を狭めた可能性もあり、今後は子育て支援の観点からの協働として実施することも視野に入れ、効果的な方法を検討したほうがいいのではないかと考える。

13 その他